

右可相守此旨者也

慶長二十年七月日

〔享保集成絲綸錄 十九〕寛文八申年二月

覺

一今度火事付而彌堅儉約を相守候様ニと被仰出候間、參勤繼目等之御祝儀ニ公義江被獻之外、

下々江は、太刀馬代、黄金壹枚、白銀五枚、三枚、貳枚、鳥目百疋迄之内、相應ニ被遣之可然事、

一國持大名衆之總領たりといふ共、部屋住之内は、公職之外、音信物不入儀ニ候事、

一端午、重陽、歳暮御祝儀之節、公儀江被獻之外、下々へは、時服被遣之儀、御無用之事、

一諸國ニ而酒造之儀、當年は去年迄之半分造候様ニと御定之上は、公儀之外、樽肴取かわしは、

樽代鳥目百疋を千疋迄之内、相應ニ被遣可然候、但其處之名酒は、輕き手樽杯ニ而被遣可然事、

一嫁娶の節は、小袖代、柳樽取かはし可然事、

一在家を爲、伺御機嫌書札并奉書の御請等は、依其品飛脚ニ而被差越可然事、

一於江戸用所有之而被差越之使者は、各別書狀呈上等は、步行若黨持參いたし可然事、以上、

二月

寛文八申年三月

覺

一町人屋敷致輕少、長押、杉戸、附書院、櫛形、彫物、組物無用、床、椽、さん、かまち塗候事、并から紙張付停

止事、

附、遊山船、金銀之紋、坐敷之内、繪書申間敷事、

一嫁娶之刻、万事成程輕可仕事、